

自分の創意で仕事をすることの感激

僕が電灯会社の工夫をしていた自分は、時間から時間までキチッと働かなければならなかった。わずかのあいだに僕は検査員に昇格したのだが、それは工場にいる検査員ではなく町へ出る検査員になった。

今までキチッと時間までに会社に行って、時間まで人に監督を受けて働いていたわけだが、今度は自分は監督者になって、しかも外に出る仕事だから自由に行動できるわけだ。東に電車に乗って行っても、西に電車に乗って行っても自由だ。一日の仕事をすませればいい。そのとき非常に、自由の天地が開けるような気がした。ぼくの20歳ぐらいの時だったから、感激といってもいいような状態だった。

その時分は体は弱かったけれども、後年、僕が全国長者番付のトップに出た時よりも、その時の方が、よっぽどうれしかった。解放されて自分が自由に仕事ができるということほど、ありがたいことはない。だから僕が会社で事業部をつかって独立採算制で自由に経営をさせるということは、そういうところから出ている。小さくても大きくても、自分の創意によって事が決せられるということは生きがいがあるものだ。これは人間が生きていく上にも大切なことだと思う。



(1962年「実業之日本」新年特大号)